僕は幼少の頃から此の溫泉此山に馴れて居るので特に茲に其概略を紹介する次第である。

德川時代の有馬溫泉

の案内記として書きたいものは恐らくは今から二百四十年前の貞享　年有馬の谷之町蒲屋五郎兵衛開板といふ有馬小鑑（振假名ひとりあんない）とある三十二葉の半紙本などであらうと思ふ。茲に掲げた二枚續きの板畫で其の面影を窺へる筆者は多分有馬の僧侶らしく寺院神社等のことが多く、町及び溫泉のことは左の數節に過ぎぬ。

一之湯十坊

大湯女はいづれもかゝといへり　小湯女

一御所坊　まさ　一掃部　なつ　一伊勢屋　たけ
一中の坊　つれ　一尼崎坊　ゆり　一れぎや　すぎ
一大門　たつ　一角の坊　つた　一上大坊　くり
一わかさや　いち

二之湯十坊

一池之坊　まつ　一下大坊　なべ　一休所　たけ
一川崎や　やく　一茅之坊　たい　一川のや　みつ
一大黑屋　たけ　一素麵屋　ふし　一ひやうゐ　みや
一みつふれ　つじ

町の名寄

一門之外　一門中之町　一寺田町　一藪之内町
一谷上之町　一谷下之町　一北之町　一へうたん町
一上道町　一かどの町　一魚之棚町　一大藏町
一筆屋町　一つかや町　一かぢ町　一上ふだい町
一たぬき戸　一だゞさき

一まの錢とりは中こう仁西上人吉野にて門前にぬ申たるもの此所へめしつれさせ給ひて御やくしのには町の掃除等のやくをつとめ湯治の衆一間にて鳥目四十二文づつうけていとなみにせよと上人よりの遺誡なり。

一溫湯かゝりやう。養生のうた

あしはさきかしらは後　かゝるべし
たゝるばなが湯扱はすきはら

一目あらひ湯　一後妻湯（はなゆ）　谷の町の内に上下に二所有なり。湯ぶれ三尺四方ばかりにかり屋あり。此湯のわきやうは湯のはたにていかにもたからかに。おのれは人のおとこなぬすみとつて

さりとはひきやうものかなとのゝしれば、其のまゝわきあがつて湯玉たつなり。

一報恩寺眞言宗本尊は聖德太子不動帝釋天

此寺より二の湯うちそと毎夜の燈明をあげたまふ寺なり。燈明錢は湯治の衆よりとりにまはり給ふなり。鳥目あぐれば湯ぶみをよみてきかせらるゝなり。

けんじなるゆなに湯ぶみをよませたら
いよ〳〵人がまいらさんせん

一天正十七年に太閤秀吉公御入湯の時、此地にて御杖にてねがはくばこゝのほゞにも溫泉あらばとねがひ給ひし時、御ことばの下より湯わき出たり。大閤御かんなのめならず思しめし、上の湯と名付給ふ。御他界ののちは此湯かはきて出ずとなり。

ねこくまで手にとる君の御ぬくはうは
つえのさきでもわき湯なりけり

一施藥院湯もとより北にあり。曹洞宗なり。本尊は聖德太子南むきに立し寺なり。此寺より一の湯内そとの燈明を毎夜あげ給ふなり、燈明錢とりにまはり給ふ時錢あぐれば湯ぶみをよみ聞せ給ふなり。

もり屋風醫術ではらふ太子でん
一湯山の神は三輪の明神なりとありしを

前尾洲大納言樣
めづらしき見ゆきを三輪の神なれば
すくな彦名のめぐみをぞしる

妙祐尼入湯して
雜波江のあしのいたみも有馬なる
湯に入りてこそよしとなりけり

一宗祇法師此湯に入りて遠寺の晩鐘かすかに聞ければ

有馬山湯に入りあひの鐘のねは
諸病無病ときくぞたうとき

此の如きはあらずもがなと思はれる一種の文學であるが、昔を偲ぶ　興として繪と共に載せる

尙ほ又諸國溫泉場に何處でもある湯女の事は旅行用心集（文化七年版）にも見え、浴室のことも詳かに出てゐるから、左に拔いて書く。

一有馬の湯は浴室一宇にして湯槽深さ三尺八寸竪二丈一尺横一丈二尺五寸底は舗石なり其の石の間に竹筒を挾其の中より湯出るなり味は鹹し中間に板壁を隔て南を一の湯とし北を二の湯とす湯宿二十軒を二十坊とし南北に相分れり此の外の家々を旅人を留る小宿といふ二十坊の家毎に二婢あり一人は大湯女といひ通稱嫁家と呼なり一人小湯女といふ是は年若なり家々代々通名を傳ふ此の二人の湯女湯治する客人に湯の廻りを告しらしめ送り迎す諸國の旅客混雜すれども其の廻り違ふことなし又留湯といふあり是は湯幕を引て他の人をとどむ

此の湯女の勢力爭ひのことが前に載せた小鑑の間の錢とりの次に見えて

一伊勢の望一勾當入湯して湯口にて湯女のせんぎして此湯にいれよういれまいとのもんだうを聞いて

二百四十年前の

摂津有馬温泉

ありま山湯口のはたのにんぎやう裸
いれういれまひ湯女のはりあひ

とあるのも面白い。

人語に隨つて湧出す温泉

豊後風土記に曰ふ。玖倍理湯ノ井。此ノ湯ノ井ハ(速見)郡ノ西河直(鐵輪に同じ)山ノ東ノ岸ニ在リ。口徑丈餘湯ノ色黑シ、常ニ流レズ、人繩カニ井邊ニ到リ聲チアゲテ大ニ言ヘバ驚キ鳴リテ涌キアガルコト二丈餘許、其ノ氣熾ニ熱シ、向ヒチカヅク可カラズ、緣邊ノ草木皆カラ枯レ萎ム、因テ慍ノ湯井ト曰フ。俗語ハ玖倍理湯ノ井ト曰フ。此の玖倍理湯なるものは恐く今の鐵輪の山手にある坊主地獄であらう。こゝでは遊客が湯を噴き上らさうとするには其の湯の出る窪みの緣で少し許りの薪を燃やす。空氣が熱せられて稀薄になると共に現に泥を交へた湯が噴騰する。

もつと怒る湯が有馬にもあつたやうである。和漢三才圖繪に曰ふ。有馬温泉ノ傍ニ後妻湯アリ、人之ニ向テ罵レバ急ニ湧上リ宛然怒カ嗔カル狀ナリ、俗呼ンデ後妻湯ト云フ。

同じく三才圖繪には支那の例を擧げてゐる。即ち寰宇記ニ云フ、安豐郡ノ咄泉ハ淨戒寺ノ北ニ在リ、泉ノ傍ニテ大叫スレバ大ニ湧キ、小叫スレバ少シク湧ク、若シ之ヲ咄レバ其ノ湧出ルコト彌々甚シ、世人之ヲ奇ミテ號シテ咄泉ト曰フ。

支那にはもつと人格?を備へた温泉があつたと見えて三才圖繪に引いた他の例は次の如くである。陳眉公ノ秘笈ニ云フ、開洲ニ妬女泉アリ、婦人靚粧綵服シテ其ノ地ニ至レバ必ズ雲雨ヲ興ス。

伊豆の熱海に清左衛門湯と云ふ湯井がある。今は深く試錐をした爲めに其の性格を失つて終つたが、もとは清左衛門清左衛門と呼ぶと止まつて居る湯が噴き出して來たと云ふ。

此等數例の人語を解する樣な温泉は間歇的性質を持つたもので、間歇性を幾度も觀察して居ると終には温泉が人格を有つた樣に思へて來るのである。